



自己学習能力の育成

国際的な学習到達度調査 PISA2022 では、日本の十五歳の生徒は「数学的リテラシー」・「科学的リテラシー」で OECD 加盟国中一位、「読解力」で二位に位置する等、高い学力を示しました。一方、「自律学習と自己効力感」の指標では、「自信がない」と答えた日本の生徒が非常に多く、この指標値は OECD 三十七カ国中、三十四位と低いことが報告されています。

この**高い学力と主体性の低さ**というギャップは日本の教育に対する警鐘であり、「自己学習能力の育成」は重要な課題ですが、この「自己学習能力の育成」を、創学舎では創立以来、教育理念に掲げています。

自己学習能力とは、学習者が自ら学習過程に主体的に関与し、メタ認知(自らの思考や学習状況を客観的に把握する力)や動機付けを駆使しながら、目標達成に向けて学習をコントロールする能力です。これは単なる「自主学習」や「自習」とは一線を画します。

自己学習において創学舎で重視しているのが「**PDCA サイクル**」です。

※定期テスト勉強時の例

● P (Plan/計画)

目標点等を設定し学習計画を立てる

● D (Do/実行)

学習計画に沿って勉強に取り組む

● C (Check/評価)

テスト後に反省点を明記する

● A (Act/改善)

反省点をもとに次回に向けての改善点を明記する



重要なのは、それぞれの段階で、**動機付け、学習方略(どのように学ぶか)、メタ認知**という三つの要素が相互に関わりながら機能する点にあります。だからこそ、単に自己選択や決定を学習者に委ねるだけでは不十分であり、我々のような講師による適切な指導やサポートが不可欠なのです。では、どのような指導やサポートが適切なのでしょうか。

深い学びは、学習者が知識の関連性や意味を自ら見出し、構造化していくプロセスで生まれます。

その際、講師の働きかけがカギとなります。(これから紹介する話は、小学生の保護者の方にも有効です。ぜひ参考にしてください。)

働きかけの一つに「問いかけ」があります。

※学習前の問いかけの例

● 今日の目標は何？(浅い問いかけ)

● 今日の学びを通して、何ができるようになりたい？(深い問いかけ)

※学習後の問いかけの例

● 何がわかった？(浅い問いかけ)

● 今日の学びと、前に習った〇〇は、どうつながっている？(深い問いかけ)

深い問いかけは、生徒のメタ認知を促し、知識を関連付け、構造化するきっかけを与えます。深い学びは、効果的な学習方略の獲得と深く関わっています。**問題を解くこと自体が目的ではなく、そのプロセスで「どのように考えたか」「なぜその方法を選んだか」「もっとよい方法はないか」を意識させることが重要です。**例えば、「その解き方を思いついたきっかけは何?」「そこで図を描いてみたのはよい工夫だね」等と、結果ではなくプロセスや方略を承認し、価値付けることで、生徒は「学び方」そのものを学ぶようになります。

自己学習能力を向上させた塾生の自己実現に貢献することが我々創学舎の使命です。そのことを社員一同忘れずに、日々指導にあたっています。

(村田)

私はHSPです、多分。(最終回)

まず、HSPの定義から。「非常に感受性が強く敏感な気質をもった人」という意味です。英語では Highly Sensitive Person。病気ではなく、あくまでも気質にすぎません。

第四段階「逃げ方・脱出の仕方」の⑧「本を読むこと」を続けます。

保護者面談や生徒面談をさせていただくと、どちらの面談でも時々出てくるのが、生徒のメンタルに関する悩みです。一例として、かなり前の保護者からの相談を紹介します。(一)「担任とうまく

いっていないようで、クラスでもイヤなことがある

るといいます。学校に行きたがりません。」(二)「や

る気はあるが集中できず、塾からも足が遠のいています。」(三)「テストが近づくと体調をくずします。」(四)「受験したくないといい出しました。どうしたらいいでしょうか?」

この面談でよかったのは、保護者の方が具体的な事例をあげてくださったことです。ただ、それぞれの「……」にその場で解決策を伝えることはできません。とりあえず、本人との面談を組みました。次が、そのときの本人の回答です。

(一)「担任の先生は普通の方で強く注意されたことをずっと気にしている。クラスで時々いじられるのをがまんしている。」(二)「やることが多くて、どこから始めたらいいか分からない。」(三)「テスト前は点が悪いと親に怒られるのが心配。授業中にはいろんなことを気にして聞いていないので、テスト勉強を始めても分からないことだらけ。」(四)「今までやってないし、これからやっても間に合わない。」

保護者も生徒も、なかなか「言語化」できない中で、三十分かけてようやくここまで聞き出ししました。一つ一つについてアドバイスは可能ですが、膨大な時間を要するので、「本」の出番です。『メンタル弱い』が一瞬で変わる本』と『繊細すぎて生きづらい私はHSP漫画家』を貸し出します。



「メンタル弱い」が一瞬で変わる本
片田智也・著
PHP 研究所 1,600円

必ず読んでもらおうように念を押して、まず保護者に読んでもらい、それから生徒に。結果、保護者も生徒も「何故前述のような状態になるのか」

を理解していただけました。勿論 人は急には変われません。ただ、「理解する」ことで視界は開けたようです。本人が日々味わう不快感は珍しくはなく、ましてや病気ではないこと。同じような感じ方をする人は自分の他にも少なからずいること。そして、自分の不快感・感じ方にはきちんと解釈があるし、解釈しなければ分からないこと。こうしたことは伝わったようです。

「本」は大切です。紹介した本を含めて読み続けてください。本人の敏感さは必ず役に立つので変える必要はありません。知識と解釈を積み上げて対応してください。最後に、いつもマウントをとられている人に一冊紹介して終わります。

『マンガ版「いい返す」技術』お勧めです。

(小林)

空の高さをどうやって測るのか

連日冬晴れのすっきりした空模様が続いている今日この頃。空を仰ぐとどこまでも抜けていくような晴天が広がり、手を伸ばせば宇宙に届きそうな気がしてきます。私は「走楽者」メンバー(詳しくは創学舎ブログ参照)の一員なので週に三、四日ほど朝ランニングを行っているのですが、天候とメンタルがリンクしているのか、晴天の日は足に翼が生えたかのように軽やかな足取りで走ることが出来ます。そのまま空を翔けていけたら気持ちいいだろうなあ……。

さて、先日走りながらふとこんなことを考えました。「空の高さってどこまでなんだろう?」

「青天井」という言葉は、価格などの数値に上限が無いことを空の高さに例えています。また、英語にも「The sky's the limit」という慣用表現

があり、これまた上限がないことを空の高さになぞらえています。

国を問わず上限がないと表現される空の高さですが、実際は空を抜けると宇宙空間が広がるため「上限がない」は言い過ぎだと言えましょう。

では、改めて、空の高さ——つまり、地球と宇宙の境界線——はどこまでなのでしょう?



まず、航空機と人工衛星の比較から境界線を考えてみましょう。空を飛んでいるという意味では似ているように思えますが、これらはどのように飛び回っているかが大きく異なります。航空機が空気によって生まれる力(揚力)を使って飛ぶのに対し、人工衛星は空気抵抗がほとんどない空間を飛びます。空気が十分にあるところまでを地球とすると、航空機が飛んでいるところは空気があるから地球だといえます。一方、人工衛星が飛んでいるところは空気がほとんど無いので宇宙です。つまり、航空機が飛べる高さの上限と人工衛星が飛べる高さの下限の間に境界線があるといえます。調べたところジャンボジェットのような旅客機だと高度10km付近、偵察機のような高高度機だと最高で高度25km付近を飛んでいるとのこと。一

方、人工衛星は低軌道のものだと高度200kmから1,000kmの間を飛んでいます。例を挙げると国際宇宙ステーションが飛んでいるのは高度400km付近です。

したがって航空機と人工衛星の比較から考えると高度25kmから200kmの間に境界線があるといえます。

工学的な視点以外からも、空の高さを考えてみましょう。領土、領海、領空をまとめて領域と言います。これらは各国の主権が及ぶ範囲として決められています。そしてそのうち領空は高さが宇宙空間までとされています。つまり、領空の最高地点が地球と宇宙の境界線と言えのですが、ここで一つ問題点があります。

地球から宇宙は連続した空間のため明確な境界線を作るのが難しいという理由から、領空の高さは世界各国で統一された基準が設けられていないのです。国際航空連盟が高度100kmを境界線と定めている一方で、アメリカ空軍は高度80kmを境界線とするなど、国や組織によって判断が異なります。

ただ、いずれの場合も先ほどの航空機と人工衛星の比較から割り出した地球と宇宙の境界線は高度25kmから200kmの間にあるという仮説と合っています。

このように「空の高さはどこまで?」という一つの問いに対して様々な観点から考えられるのが学問の難しさであり面白さでもあります。何か考えが行き詰ったとき、今までと違うアイデアを試すと、思いもよらぬ発見があるかもしれません。空のように広い視野をもって学習すれば君たちの可能性はますます「The sky's the limit.」になることでしょう。(平野)

新中1準備講座 3月スタートコース開講!

～数学と英語の中学内容先取り授業です～

最近の英語教科書は新課程前に比べると単語数が大幅に増加、表現も難化しています。それに応じて、1年生の前期の最初の定期テストでいきなり難度の高い多様な問題が出題され、以前のような高得点は取りにくくなっています。そこで、創学舎では中学準備講座を早めに1月からスタートして、じっくり3か月かけて、習熟するよう学習を進めております。

今回、習い事やクラブ、中学受験などの関係で、これから準備を始めようというお子様のための、3月スタートのコースを開講いたします。

まずはお電話で各教室にお問い合わせください。

新中学1年生対象「割合」補習講座 3月実施

45分×2コマ 受講料:1,100円(教材費込み)

「割合」単元は、抽象的な概念把握が必要となるため、算数の単元の中でも最もつまづくことが多いところです。

しかし、中学校では、正負の計算の学習後すぐに「文字式」「方程式」が必要になります。また、「割合」が苦手のままでは、物理の「圧力」、化学の「定比例の法則」、地学の「湿度」など、理科の計算でも苦労することになります。

本講座では、小学校の「割合」に苦手意識がある新中1生を対象に、割合とは何かというところから様々な問題演習まで行います。詳細は、各教室の別紙講座案内をご覧ください。